



Everybody is free to visit the Amish village and see the unique Amish way of life as the target of tourism. However, if one fails to look at this core, they are not seeing the true identity of the Amish way of life. One must not forget that their simplicity, plainness, and gentleness coexist with this love.

## I

アーミッシュは、現代アメリカ社会に住む人々とは思えないような、普通のアメリカ人とは異なる生活習慣を持つ集団として知られている。たとえば、アメリカ社会の象徴である自動車を所有せず、バギーと呼ばれる四輪馬車が移動の主な手段である。電気を使用せず、電話等の通信機器も家庭にはない。写真撮影は拒否される。ほとんどのアーミッシュが農業以外の職業に就かない。違う学年の生徒が同じ教室で学ぶ一教室制の学校などである。

このような特徴からのみアーミッシュを眺めるならば、現代社会の利便性を頑なに拒み続ける一風変わった共同体と看做し、一目アーミッシュを見たくもなろう。現にアーミッシュを観光の対象とする観光客が増えている。

アーミッシュの珍しい習慣にはそれなりの根拠と歴史があり、決してたまたま偶然に生じ、いつの間にかアーミッシュの奇妙な生活になったのではない。

筆者は、1972年の夏から約1年、アーミッシュの生活習慣に比較的容易に接することができるペンシルベニア州 New Wilmington に住んだ経験がある。私が出会ったアーミッシュは皆人懐っこい人々で、警戒心を持って接しなければならないアーミッシュなど一人もいなかった。外国人である私を自然体で受け入れ、心が解れる不思議な魅力を持つ存在であった。

昨年、2006年10月に、アーミッシュ学校で銃撃事件が起き、メディアで大々的に報道され、改めて筆者の心をアーミッシュに向けさせた。そして、殺害された少女たちと、彼女らの家族に代わり事件の真相を探り明らかにすることが、アーミッシュの日常生活に触れることが許された自分の使命ではなからうか、との思いが非常に強くなった。

アーミッシュの特徴の一つであるが、自分たちの主張を原稿にして世に問うようなことはほとんどない。自分たちが基本的に忌避するこの世とのかわりに繋がりがかねないからである。

今回の考察の主な目的は、以上の事情から、アー

ミッシュ学校襲撃事件の真相を究明することであるが、アーミッシュの生活習慣、歴史、伝統等をも含めて総合的に検討し、アーミッシュらしい生き様の諸相および背景等も明確にしたい。

## II

1693年から97年頃にかけて、スイスベルン州の寒村で、ある一つの宗教論争が続いていた。この論争の結果、再洗礼派から分派した共同体がアーミッシュである。主導的役割を演じた指導者が、ヤコブ・アンマン (Jakob Ammann 1644-1730) で、アンマン派を意味するアマニッシュ (Ammannisiche) がやがてアーミッシュと呼ばれるようになる。<sup>(1)</sup> このアンマンという人物は、徹底してこの世的な生き方を忌避し、気性の激しい熱弁家で、自己の信念を貫き通す宗教指導者であつたらしい。<sup>(2)</sup>

「この世と妥協してはならない」(聖書ローマ人への手紙 12・2) が彼の属していた再洗礼派の信仰と生活の基本原理である。そのような生き方を目指しながら飽くまでも現実的には柔軟な対応をするのか、それとも、信仰の純粋性を維持するために問題のある信徒を自分たちの集団から追放するかどうか論争のポイントであり、<sup>(3)</sup> やがて、現状肯定派と改革を主張するグループが分派する。

当然の結果として、現状を追認する同胞に抵抗したグループは、孤立し、移動を余儀なくされる。<sup>(4)</sup> スイスベルン市当局などは、アーミッシュだけでなく、再洗礼派そのものをも、北アメリカへ追放する計画を立てていたほどである。<sup>(5)</sup>

アンマンが属していた再洗礼派は、宗教改革時代にフルドリッヒ・ツヴィングリの弟子たちから分派し、幼児洗礼を否定し、成人の信仰告白に基づく再洗礼を主張した。そのような変革は既存の教会に対する大胆な挑戦であり、カトリック教会および他のプロテスタント教会から迫害を受け、再洗礼派の多くの信徒が殉教する。互いの足を洗う「洗足式」、良心的兵役拒否を貫く絶対平和主義者であることも再洗礼派の特徴である。このように、再洗礼派は教会史上異端とされてきたが、20世紀に入ってからは

その運動が再評価され、現在では、福音派の潮流の一つと看做されている。アーミッシュはこの流れを受け継ぐ信仰共同体である。

国家と教会の分離を唱え、戦争を拒否し、絶対平和主義を貫き、また偶像も認めないので、再洗礼派は、礼拝を禁じられ厳しい迫害を受ける破目になる。ドイツを舞台にヨーロッパ各国を巻き込んだ 1618 年から 1648 年の、いわゆるヨーロッパにおけるカトリックとプロテスタントの対立から起こった一連の宗教戦争の後、彼らは迫害を逃れ、戦火で荒廃したドイツ南部や、フランス東部国境沿い、ライン川西岸の地方に移り住む。そして、その後、ヨーロッパでの既成教会と国家権力による弾圧と迫害を逃れるため、同じ絶対平和主義者であるクエーカー教徒のウィリアム・ペンの誘いに応じ、信仰の自由な地、アメリカペンシルベニア州（ペンの名前に因んで名づけられた）へ渡る。<sup>(6)</sup>

このように再洗礼派の歴史を辿ると、アーミッシュの誕生はアンマン個人の強烈的な信仰と行動がもたらした結果であることは否定できないが、<sup>(7)</sup> その信仰的、歴史的ルーツは、16 世紀宗教改革時代の再洗礼派の運動に遡る。

16 世紀のヨーロッパの宗教改革運動では、既成教会への信徒の不満が強くなり、ルター、ツヴィングリ、カルヴァンなどによる宗教改革運動へと繋がったことはよく知られている。しかしながら、再洗礼派も急進的な力を持っていた。再洗礼派は、原始キリスト教精神に立ち返り、この世と国家の支配下に生きるのではなく、あくまでも新約聖書が説く信仰を文字通り生きる選択肢を主張した。その結果、迫害を受け、礼拝は人目を忍んで夜に行い、山の洞窟のような人里離れた場所で礼拝せざるを得なくなる。<sup>(8)</sup> これがアーミッシュのルーツである。つまり、アンマンの信仰と行動の原型は、こうした再洗礼派の信仰と歴史の延長線上に位置づけられる。

この世と妥協しない信仰だけではなく、このように絶えず迫害を受け、他の集団から疎外されてきた歴史も、この世の人々と一定の距離を置く生活習慣を形成してきた大きな要因であることは明らかである。

### III

伝統を重んじるオールド・オーダー・アーミッシ

ュらしい生活としては（一方、比較的規律が緩やかなアーミッシュをニュー・オーダー・アーミッシュと呼ぶ）、<sup>(9)</sup> すでに触れたように、電気や電気製品を使わない。共同で電話を外に設置することはあるが、自宅にはない。車は所有しない。しかしながらアーミッシュタクシーがあり、運転手と車を雇うことがある。普段はバギーと呼ばれる四輪馬車が唯一の移動手段。職業としてはほとんどのアーミッシュが農業に従事。礼拝は各家庭持ち回りで行き、外部への伝道活動は原則としてしない。そして、写真を撮られることを喜ばない。学年が異なる生徒が同じ一つの教室で学ぶ。さらに、絶対平和主義者である、等々である。

電気、電話、自動車の不使用は、この世的な便利な生活に惹きつけられ、この世と妥協しないアーミッシュらしい生き方の土台を揺るがしかねない危険性が伴うからである。写真は偶像崇拜と考える。「神の土」を耕す農業こそが彼らの信仰の純粋性を維持するためにもっとも適切な職業であるとも説明できようが、<sup>(10)</sup> 再洗礼派の歴史との絡みで考えるならば、迫害を避けてスイスの山中やドイツ南部に逃亡したがゆえに、そこで農業に従事するものが増えた歴史の影響もあろう。因みにペンシルベニア州などでアーミッシュは「ベストファーマー」として高く評価されている。<sup>(11)</sup>

各家庭で礼拝するのは、すでに触れたように、迫害された時代に教会堂に集うのは困難で、信者の家庭で礼拝を続けた歴史の影響である。殉教の歴史があるせいか、外部に伝道することは原則としてしなくなった。戦争に協力しない絶対平和主義者としてはクエーカー教徒がよく知られているが、アーミッシュも同じように絶対平和主義者である。<sup>(12)</sup> 聖書の教えの根本を平和創造と捉える。

一見奇妙で不可思議な生活習慣に思えるアーミッシュの暮らしも、再洗礼派の歴史と照らし合わせて考察するならば、彼らの信仰とそれに伴う歴史の産物であることが明白になる。

アーミッシュは、「生ける博物館」あるいは、「社会的化石現象」とも表現されることがあるが、<sup>(13)</sup> 決して過去の遺物と化してしまっただけではなく、普通のアメリカン・ウェイ・オブ・ライフに背を向けて現に生活をしているアーミッシュが、アメリカ 24 州とカナダのオンタリオ州に約 20 万人位いる。<sup>(14)</sup>

#### IV

公立学校の教育では、様々な利便さに晒され、さらに個人主義的な教育が行われるため、アーミッシュは、自分たち独自の学校を運営し、全米で3万人を超える生徒たちが学んでいる。全米で1252校ほどある。

アーミッシュは8年間の学校教育は認めるが、それ以上の高校教育は無用と考える。高校へ通わせることは、自分たちの子供を、個人主義、競争、合理主義、世俗主義に晒すと危惧する。<sup>(15)</sup>

アーミッシュは裁判で争うことを好まないが、ウイスコンシン州で、アーミッシュの14歳と15歳の子供たちを高校に通わせることを拒否した罪で、両親が逮捕されてしまい、裁判になった。1972年に、この問題は最高裁判所で判決が下され、アーミッシュの伝統的なライフスタイルを生きるためには高等教育を必要としないことを是認し、アーミッシュ勝訴の判決を下す。<sup>(16)</sup>

アーミッシュ学校では、実践的学習を重視し、自己実現より共同体の幸福を、世俗社会との分離を目指す意味で、公立高校の教育目標と異なる。<sup>(17)</sup>

アーミッシュの学校の一日は大体このようなスケジュールである。朝8時30分になると、学校の校舎の上に吊るしてある鐘が鳴らされる。教室では教師が最初に、聖書から1節を選んで朗読する。その後、「主の祈り」を斉唱、それから一列縦隊で教室の前に進み、ドイツ語か英語で何曲か歌う。それから、それぞれの学年の生徒が、読み、算数等の勉強をし、先生や上級生にチェックしてもらう。10時から15分間は休み時間。10時15分から授業再開。11時30分から12時30分までは昼休みで、お昼御飯と遊びを楽しむ時間。午後は地理、歴史、保健、英語の授業等があり、午後3時半に終了。<sup>(18)</sup>

同じ教室に、普通は1年生から8年生まで40人程度の生徒がいる。アーミッシュの学校の平均生徒数は、27人。子供たちは、学校を大きな家族のように思い、特に年少の子は、上級生の授業も聞くことで多く学べる。

アーミッシュ学校の教師はほとんどが若い独身女性であり、教えるということは、愛と献身の神聖な職業であり、お金は二次的なものにすぎないと受け止めている。成長していく生徒を見ていると、「まるで春に花開くつぼみのような気持ちになる」、と

述べる先生がいるほどである。<sup>(19)</sup>

アーミッシュの学校教育は、一言で言えば、生活教育である。学校では、読み、書き、算数が基礎教科で、その他に保健、歴史、地理なども教えられることが多い。一部の学校では、美術や農業も科目に入っている。通常、理科は教えないが教える学校もある。

アーミッシュ学校設立当時は、公立学校の教科書が使われていたが、現在はそれを印刷し直したものや、独自の教科書を新たに編纂して使用している。<sup>(20)</sup>

勉強時間の始まりや終わりに、またゲストを迎えるときや各種イベントの際に歌われる歌は、協調の精神を養うのに役立っている。<sup>(21)</sup>

このような教育の結果、アーミッシュの子供は、静かで、友好的で、責任感、誠実性を身につけるようになる。<sup>(22)</sup>

また、アーミッシュの家庭では、小さいときから、責任を持たせ、仕事もさせる。また、してはいけないこと、すべきことを日常生活のなかで教える。このように家庭教育も、子供の発達、成長と人格形成に大きな役割を果たす。<sup>(23)</sup>

アーミッシュの生活は家族単位で、通常は家族全員で農場や家庭で仕事をする。こうした家族単位での仕事を通してアーミッシュの価値観を育み、また、学校や礼拝においても自分たちの信仰共同体の習慣、文化、価値観を確認し、強固なものにしていく。したがって、学校だけではなく、アーミッシュの家庭および共同体におけるすべての活動が子供たちの教育である。

#### V

アーミッシュの、自己犠牲を厭わない、暴力を使用せず、無抵抗で、絶対平和主義的な生き様は、彼らのユニークな生活習慣ほどは知られていない。

非暴力という意味では、マハトマ・ガンジーを思い出す人も多かろう。彼は、悪法に対しては、命を賭しても非暴力で闘う。「非暴力こそ最大の武器である」、と断言し、どうしても非暴力を闘う手段として用いる面を否定できない。<sup>(24)</sup>

一方、再洗礼派の歴史を眺めると、たとえ相手は自分を殺害しようとする極限状況におかれても、全く抵抗しないで自分の命を差し出す歴史を見出す。例えば、1560年代に、オランダの再洗礼派、ダーク・

ウイレムズは追手に追われていたが、氷のはった川を何とか渡りきって逃げる事ができた。ところが、その追っ手が川に落ちたのを目撃した彼は、こどもあろうにその追手を救出する。その結果、彼は捕縛され、火刑に処せられる。

さらに、「ホフステラー虐殺」として今日に至るまでアーミッシュに語り継がれている歴史がある。フランス人とアメリカンインディアンが戦っていたときである。アーミッシュ派であったヤコブ・ホフステラー (Jacob Hochstetler 1704~75) は彼らと仲良く暮らしていた。ところがある晩、彼を知らないアメリカンインディアンが彼の家を襲う。彼の息子たちが応戦しようとして銃に手を伸ばそうとすると、ホフステラーは銃を息子たちの手の届かないところに投げ捨てる。アメリカンインディアンは、撃たれて負傷したホフステラーと彼の息子ジョセフとクリスチャンを連れ去るが、他の者を殺害する。<sup>(25)</sup>

こうした歴史をいかに理解すべきであろうか。ウイレムズは無事川を渡って敵から逃亡できたのに、なぜわざわざ自分を捕らえ処刑しようとする輩に、自分の命を差し出す選択をするのか。同じように、ホフステラーの場合も、なぜ、アメリカンインディアンの襲撃に銃で応じず、家族と自らの命を危険に晒す決断をするのか。

ギリシャ語には「愛」を表現する言葉が三つあると言われる。それは、「エロース」、「ピリアー」、そして「アガペー」である。原始キリスト教の福音記者たちは、「エロース」のような性愛を含む表現ではなく、また、友情や友愛の意味をも含む「ピリアー」でなく、家族愛のような意味を持ち、それ以外に特に限定された強い用例のある愛ではない、この「アガペー」を「神の愛」を意味する言葉に採択したと言われる。

ウイレムズやホフステラーの行動は、「アガペー」が家族愛のような意味に近いとするならば、そのような愛を遥かに超える行為であろう。一般的には、「アガペー」とは無限の愛と理解される。ウイレムズやホフステラーの行為は、彼らなりの無限の愛の行為ではあろうが、言語で適切に定義するのは困難である。自らの命を差し出す二人の行為そのものが二人の生ける信仰、生き様であり、ここには、二人が属する再洗礼派のキリスト教理解が反映さ

れている。

この二人の、敵に対してさえ己の命を預ける行為こそが、歴史的に語り伝えられてきた、アーミッシュ・ウエイ・オブ・ライフの奥底に秘められているアーミッシュらしさ、生き様のコアなのである。

## VI

2006年10月2日午前10時ごろ。米東部ペンシルベニア州ランカスター郡 ニッケルマインズにあるウエスト・ニッケルマインズ学校に、散弾銃、短銃、ライフルを持った男が侵入。女子児童らを人質にとり立て籠もる。約1時間後、州警察が学校を包囲したが、犯人が発砲。10人の女兒を撃ち、5人が殺された。犯人は警察が突入する前に銃で自殺。

アーミッシュの村にある7歳から13歳までの児童が一つの教室で授業を受けていて事件に遭遇。事件当時は26人の児童がいた。州警察の発表によると、犯人は男子15人と妊娠している教員補助らを教室から出した後、持ってきた木材で入り口をふさぎ、女子生徒を黒板の前に並ばせ足を縛る。警察に包囲網を解かなければ10秒以内に発砲すると電話で通告、まもなく連続発砲。男は、近所に住むトラック運転手で、アーミッシュではないが、牛乳を運ぶトラックの運転をしていたので、その地域のアーミッシュが知っている人物である。

20年ほど前、娘が未熟児として生まれ、わずか20分ほどで死亡した悲惨な体験がある犯人は、それ以来、生きることに意味を見出せないばかりか、神にも相当の怒りを持っていらしい。<sup>(26)</sup>

そのような事情があり、小さな女の子には複雑な思いを抱いていた可能性がある。しかし、この犯人はアーミッシュの女の子に特に憎しみを抱いて犯罪に及んだのではなく、たまたま近くにあるアーミッシュの学校を狙ったようである。

この悲惨極まりない事件の実相とその事件への対応が明らかになるにつれ、人々を非常に驚かせたことがある。殺された生徒の中に、自分を先に殺して自分より小さな子供を助けてと懇願して射殺された Marian Fisher (13歳) がいたこと。<sup>(27)</sup> この生徒の妹が病院で意識を回復した後にそのように証言している。この妹も次は私を殺して、と申し出た。

さらに、犯人の家族が地域に住んでいるが、その

家族に復讐するのではなく、娘が犠牲になったアーミッシュは事件当日の午後には赦しを表明。ここで目をそらせないのは、目をそむけたいとする事件の残酷性だけではなく、自分の命を差し出した Marian Fisher、および、事件当日の午後にはもう犯罪者の家族に赦しが表明された事実である。普通のアメリカ社会ではまず有り得ない対応ではなからうか。このような犯人の家族はその地域に住めなくなるのが普通であろう。まさに、「自分で復讐することをしないで、神の怒りに任せなさい」（ローマ人への手紙 12・19）を生きている姿である。

極限状況において何ら抵抗せず自らの命を提供するという意味では、追手を助けて殺されたウイレムズ、およびアメリカンインディアンの襲撃に銃で応戦しなかったホフステラーの行為と、この少女 (Marian Fisher) の命を捧げる行為が重なる。

生き残った二人の女の子から事件の状況を聞いた親の話によると、犯人が男の子や大人たちを教室の外に出した後、残された女の子たちは、「なぜこうしたことをするの?」、と犯人に問い質したそうである。犯人は「神に怒っている」、と応えたそうである。犯人に特に抵抗したとかの報道がないので、勿論推測は厳に慎まなければならないが、Marian Fisher 以外の女の子たちも、「なぜ」、との問いは発したものの大した抵抗もせず犯人の指示に従って、命を危険に晒す状況に身を委ねたのではなからうか。

アーミッシュの生き様を表現するのに、Plain、Simple、Gentle のような形容詞がよく使用されるが、この女の子たちの行為および赦しを表明するアーミッシュの姿を適切に表現する形容詞はあるだろうか。敵に対して抵抗どころか、自ら命を捧げようとする積極性さえ認められる行為、そして、極悪非道な犯人を決して憎まず赦す行為そのものを形容詞とする他はなからう。

アーミッシュを観光対象として眺めることは自由であるが、普段は見えないこの部分を見落としては、アーミッシュの真のアイデンティティを窺ったことにはならない。命を差し出した女の子たちの行為および赦す行為は、まさにアーミッシュがアーミッシュである、厳然たる事実を世に示した出来事である。

幼気な命を捧げた 5 名の女の子たち、Naomi Rose

Ebersole (7 歳)、Anna Mae Stoltzfus (12 歳)、Marian Fisher (13 歳)、Mary Liz Miller (8 歳)、Mary の妹 Lena Miller (7 歳)<sup>(28)</sup> の御冥福を衷心より祈りつつ筆を擱く。

## 注

- (1) 坂井信生著 『アーミッシュの文化と社会—機械文明に背を向けるアメリカ人—』ヨルダン社 1973 年 pp.25-26
- (2) Ibid., p.27
- (3) Ibid., p.29
- (4) Ibid., p.39
- (5) 池田智著 『アメリカ・アーミッシュの人びと「従順」と「簡素」の文化』 明石書店 1999 年 p.88
- (6) ドナルド・B・クレイビル著 杉原利治 大藪千穂訳 『アーミッシュの謎 宗教・社会・生活』 論創社 1996 年 p.195
- (7) 『アーミッシュの文化と社会—機械文明に背を向けるアメリカ人—』 pp.25-27
- (8) Merle and Phyllis Good, *Most Asked Questions about the Amish and Mennonites*, Intercourse, PA 1979 pp.10-12
- (9) サイ・フィッシャー+レイチェル・ストール著 杉原利治+大藪千穂訳 『アーミッシュの学校』 論創社 2004 年 pp.149-150
- (10) 『アメリカ・アーミッシュの人びと「従順」と「簡素」の文化』 pp.184-186
- (11) 『アーミッシュの文化と社会—機械文明に背を向けるアメリカ人—』 p.144
- (12) Ibid., p.200
- (13) Ibid., pp.195-196
- (14) 『アーミッシュの学校』 pp.145
- (15) Ibid., p.166
- (16) Ibid., p.34
- (17) Ibid., pp.34-35
- (18) Ibid., pp.58-63
- (19) Ibid., pp.137-138
- (20) Ibid., p.181
- (21) Ibid., p.187
- (22) Ibid., p.192
- (23) Ibid., p.193

- (24) ガンジー (森本達雄訳) 『非暴力の精神と対話』 第三文明社 レグレス文庫 2001年 p.45
- (25) 『アメリカ・アーミッシュの人びと「従順」と「簡素」の文化』 pp.106-107
- (26) <http://www.msnbc.msn.com/id/15113706>
- (27) The Japan Times Oct 8, 2006
- (28) <http://www.msnbc.msn.com/id/15113706>